

令和5年度 第1回下野市教育委員会臨時会議事録

日 時 令和5年12月19日(火) 午後2時40分～午後3時40分

会 場 下野市立国分寺中学校 図書室

出席委員 教 育 長 石崎 雅也 職務代理者 永山 伸一
委 員 石嶋 和夫 委 員 佐間田 香

欠席委員 委 員 川田 玲子

出席職員 教育次長 近藤 善昭
教育総務課長 高山 正勝
学校教育課長 石島 直
生涯学習文化課長 根本 宣明
文化財課長 山口 耕一
スポーツ振興課長 伊藤 隆行
学校教育課指導主事 佐々木功一
教育総務課課長補佐 平野 享
教育総務課主査 若林 達哉
国分寺中学校長 塩沢 建樹
国分寺中学校教頭 稲葉亜希恵
国分寺中学校生徒指導主事 横山 真樹

公開・非公開の別 公開

傍 聴 者 1 人

報道機関 0 人

議事録(概要)作成年月日 令和6年1月15日

討 議

「不登校について」

(石崎教育長)

1. 開会
2. 教育長挨拶
3. 議事録署名人の選任 永山委員及び佐間田委員を指名
4. 討議

今回は「不登校について」というテーマで討議を行う。
はじめに、事務局から説明を求める。

(石島学校教育課長)

資料に基づき説明を行う。

資料1 誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策について（文部科学省通知）

資料2 COCOCO プラン（文部科学省作成）

資料3 COCOCO プラン概要（文部科学省作成）

資料4 令和5年度下野市学校教育サポートセンター要覧

(石崎教育長)

国分寺中学校の状況について聞かせてほしい。

(塩沢校長)

まず、年度当初に「不登校対応マニュアル」について共通理解を図っている。その中の「不登校の未然防止」として、第一は学級経営、第二は学習指導、第三は子どもとの関係について学校における教育活動をしっかり行うことが、不登校を未然に防ぐ最大の方法であると考え、職員間で共有を図っている。また、入学式などで保護者の方に「何か困ったことがあれば相談してください」と声を掛けている。

不登校対応の基本的な考え方として「早期発見、早期対応」が最も重要であると認識している。学校では、生徒指導主事を中心に子どもに対して生活アンケートを年に1回行っている。また、保護者の方から家での子どもの心配な様子をリーバーのコメント欄に書いてくれることがあり、学年・学校で共有して早期に対応している。

不登校傾向の生徒に対しては、3日休んだときには家庭訪問をしている。不登校からの復帰に向けた指導では別室登校をさせ、必ず朝、担任が声を掛け学びから離れないようにしている。スマイル教室にも関わっている生徒に対しては、サポートセンターと連携を取り、生徒と保護者とサポートセンターをつなぐ取り組みをしている。

学校に月に1～2回スクールカウンセラーが来ているので、悩みを持っている生徒に相談させたり、家庭訪問をしても会えない生徒に対しては、スクールソーシャルワーカーに訪問してもらったりしている。

最後に、関係機関との連携ということで、警察、子ども福祉課、児童相談所、サポートセンターと生徒指導主事を窓口として、迅速に連絡を取り合っている。今後も迅速な対応をしていきたいと思っている。

(石崎教育長)

質疑等はあるか。

それでは、私から国分寺中学校に尋ねる。「COCOLO プラン」の「学校の風土の見える化を通して、学校をみんなが安心して学べる場所にします。」という部分について、先生方は一人一人意識しているか。

(塩沢校長) 実際に先生方がやっていることではあるが、意識はしていないと思う。

(石崎教育長) 教育委員会では「国から通知が出ている」ことを議会で説明しているが、一番肝心の学校の先生方に伝わっていない。お詫びをし、周知や働き掛けをしていく。

他に意見等はあるか。

(石嶋委員) 早期発見、早期対応のことについて聞きたい。子どもたちの登下校時どのような表情で校門をくぐるかが大切だと思っている。働き方改革で先生方の出勤時間について早く来るようには言えないが、子どもたちの登校時の表情を確認できていないと思われる。私はスクールガードボランティアをしていて、校門に入ってからなかなか昇降口、教室に入らない子が数人いるのを見ているが、そういう状況を担任の先生が知っているかどうか大きいと思う。今すぐお答えいただくのは難しいかもしれないが、その辺りを考えていく必要があるのかと思う。

(石島学校教育課長) 私も下野市内の中学校、小学校で勤務した経験があるが、職員の出勤時間よりも登校時間の方が早い学校の方が多いと思われる。学校の登校時間と職員の勤務開始時間について、全ての学校について確認させていただく。

(石崎教育長) 他に意見等はあるか。

(佐間田委員) 2つほど意見を述べたい。1つは、文科省のCOCOLOプランについて、現場に周知していただきたいということ。中学生の間で「こども六法」という、自分たちにどういう権利があって、どういうもので守られているかということ、子どもたちに分かりやすく説いた本が流行っていたことがあり、それを読んだ子どもたちが、自分たちがどういう法律で守られていて、どういう権利を持っているかということにすごく興味を持っている。また、私の知る有識者の方は国の方針等の情報を保護者に提供しており、そういった生徒や保護者が知っている情報を先生たちが知らないというのは、危機的な状況だと思う。

2つ目は、子ども自身が頭痛や腹痛のような心身の不調を訴えるが、その理由が分からない場合が多く、先生方の声掛けのタイミングやどのようにフォローすべきかの判断が難しいと思われる。とりあえず、誰か、先生方やスクールカウンセラーなどに話を聞いてもらうだけでも不登校にならずに済むのではないかと感じている。

(石崎教育長) 2つ目の意見について、説明できることはあるか。

(横山生徒指導主事)

相談窓口というか、3日間休んだら必ず顔を見て、大丈夫か、ということで訪問に行く。その際に、長期に渡りそうだなということであれば、スクールカウンセラーに話すことを本人と保護者に伝える。また、学校という場所に来られない子には、スクールソーシャルワーカーと一緒に行って、専門的な話を聞いてもらうというような取組をしている。

(佐間田委員)

別の学校だが、「心理士さんと学校の先生と保護者に囲まれて質問攻めにされてすごく嫌だった」と言っていた不登校の子の話聞いたことがある。うまく運ぶにはどうしたらいいのかと思う。

(石崎教育長)

相談窓口について、学校以外にもあるかと思う。

(石島学校教育課長)

相談窓口としては、学校教育課に連絡が入ることもある。サポートセンターに引き継ぐということもあるし、県などの相談施設・機関などについてアナウンスすることもあるが、確かに積極的な周知が足りない部分もあるかもしれない。学校と連携しながら、しっかりとつないでいきたいと考えている。

(石崎教育長)

学校からの要望に、サポートセンターのホームページを見ると、他に相談できる場所の情報がなく、相談窓口がそこだけだと思ってしまうので、必ずサポートセンターのホームページには「学校にも相談するように」とか「学校にも教育支援センターがあります」とか、そういった情報を載せてほしいというものがあり、その通りであると思っている。

(永山委員)

どうしても不登校の話をする、大人は「何か原因があって学校に行かないのだろう。その原因を取り除けば学校に行くのだろう。」というような、病気を治すみたいな見方で考えがちである。

私はこの文部科学省の対策はとてもいいと思うが、「学校に行けないことが普通ではなくて、それを直さなくてはいけないんだ」というような方法でなくて、まさに、この「学びの機会を保障する」という意味で、必ずしも、最終地点を学校に置かずにサポートできる対策が一番だと思う。今は、仕組みとしてそれが大分できているが、意識の面ではなかなかそうになっていない。大人がそういった子どもたちとつながりを切らないということがとても大切だと思う。国分寺中の、3日来なかったら家庭訪問をするというのは本当に素晴らしい取組だと思うので、これはぜひ続けていただきたい。

不登校の子を何が何でも学校に行かせるというのも間違いだし、だからといって、行かないから諦めてしまうというのも間違いであり、諦めずにその子との関係を持ち続けるのが大事だと思う。学校の先生や家庭、それ以外の方も含めて、いつでも対応できるようにしておくというのがとても大切だと思う。下野市では、

学校は3日経ったら先生方が家庭訪問をし、サポートセンターもあり、資源としては十分だと思う。その資源をいかに上手に、有機的に使っていくか、それをまた子ども本人に、どうやって知らせていくかというところが課題になってくると思う。

(石崎教育長)

他に意見等はあるか。

(石嶋委員)

適応指導教室ができ始めたときに、色々なところに適応指導教室ができて、学校へ戻すのが目的の適応指導教室であるはずなのに、居心地がいいから、満足してしまって学校になかなか戻ってこないという批判的な意見を言っていた方がいた。その時はそのようなものなのかと思っていたが、経験を積んだ今では、学校へ戻すよりも何よりも、その子にとって居場所があるということがまず一番重要だと思う。適応指導教室が、その子にとって居心地が良くて、居場所があればもうそれでいいのではないかと。そうやって、つながる大人、特に責任ある立場の大人で、長くつながっている人がいればいいと思うようになった。せめて3年間は教員がつながってあげるのが重要かと。

(佐間田委員)

先ほどの相談窓口の話で、「カウンセラーさんとつながったらどう？」ということをお話することがあるが、実際、利用者の保護者目線でいうと「月に1度、この日しか」という人にアクセスするのはハードルが高い。普段からいつでも相談に乗ってくれる人がいると良いと思う。

高校見学に行った際、職員室がフルオープンになっていて、いつでも質問しに来ていいことになっている学校があった。先生はお忙しいのでなかなか難しいと思うが、「予約なしでも行ける」ような所があると、一番良いのかなとは思う。

(横山生徒指導主事)

窓口ではないが、養護教諭のところに話しに行き、そこから担任に伝わり問題が分かることがある。働き方改革に逆行している部分もあるかと思うが、連絡帳のような生活ノートというもので、生徒と担任の先生が毎日やりとりをしていて、子どもたちがそこに悩みごとを書いてくることもあり、担任の先生が把握して、他の先生方と共有して、一緒に対応するということができている。

(佐間田委員)

子どもたちの実態として、SNS関係など、生活ノートには書けない悩みもあると思う。

(永山委員)

私は、学校制度自体に若干無理が来ているような気がする。やはりある程度は、集団の中に馴染めない人もいて、それもまた人間の生き方や個性であり、「何が何でもみんなと同じことができないと、それは異常。」というような捉え方自体がおかしいと思う。改善が成果だと思われがちだが、「つながり続ける」こと自体を成果だという風に、ぜひ先生方に認識していただければ

ばと思っている。

(石崎教育長) 教頭の立場から不登校に関して、ご意見等、あるいは感想等を伺いたい。

(稲葉教頭) 横山生徒指導主事をはじめ、先生方は不登校の生徒たちに本当に一人一人向き合っており、私も教頭の立場でできることはやっていきたいと思っている。しかし、どこの学校でも対応する先生の人数が足りないと感じている。

(石嶋委員) 中学校は、空き時間がある先生がいるから対応しているけれど、小学校は空き時間そのものがほとんど誰にもない。小学校の場合は、別室登校みたいなものは不可能な状況か。

(石島学校教育課長) 基本的に小学校は不登校の子が少ないため、教頭先生や教務主任、無担の先生方が対応したり、養護教諭が保健室で対応したりしている学校が多い。人数が多くなったときは「校内教育支援センター」を設置して対応している学校もある。

(石崎教育長) 不登校は簡単に解決できない問題ではあると思うが、本日の協議を踏まえて、今後の進め方を検討させていただきたいと思っている。

それでは、以上でよろしいか。(全委員異議なし)

本日の議事日程は全て終了した旨を告げ、午後3時40分閉会。

議事録作成者

議事録署名人

議事録署名人